

「痛みのない『苦難』」

創世記 2 章 18 節前半

日本キリスト改革派東京教会牧師・本学講師 野島 邦夫

いまほど人と人の関係が意識されている時期はあまりないと思います。いうまでもなくコロナ禍が原因です。今年初めころから深刻化して今に至っているこの病禍は全世界で、多くの領域で、深刻な問題を引き起こしています。人と人との関係についてもそうです。

外出時はマスクを着用して。電車の中で座るのもあいだ一席あけて。お店で買い物をする時は店員さんと 2 メートルの間隔をあけて、レジでの支払いも透明シートを介して。食事をしようと思っても入店人数制限で入れない。さらに、友人と個人的に会うこともはばかれる、会ってもなんとなく距離を取る。仲の良い友人たちと集まって話をするのもためらう。こんなことが当たりまえの社会になってしまいました。

この感染症の原因である「新型コロナウイルス」はまだその性質がよくわかりません。直接的な治療薬はまだありません。根本的な予防法として期待されているワクチンもまだ開発中です。¹ ただけはっきりわかっていることは、このウイルスは感染力は非常に強いが致死率は「ほどほどに緩やか」²。これがもしエボラのように致死率が非常に高ければ、社会経済の停滞を憂慮するどころではなく隔離政策も迅速・厳格に行われるでしょう。しかし新型コロナはこのような特徴を持ちますから、感染対策も社会の動向・経済の状態を配慮しながら「ほどほど緩やか」です。また、感染しても無症状やごく軽症の人が多いようです。知らないうちに、また油断して、感染を広げてしまいます。ですから、当面の政策として、また個人的な心掛けとして「三密を避ける」はうなずけます。

ただこのことが特殊な状況であることをよほど注意しておかなくては、個人的にも人と距離を取り、集会も行わないことが常態となるでしょう。そしてこれはただ物理的な事だけではなくて、人の内面に影響を及ぼすのではないかと懼れます。見失われそうになっていた人と人との心の「つながり」の大切さが、最近再び強調されつつありますのに。皆さんもその大切さを、このような状況の中で実感しておられるでしょう、「学友たちと会って話したい」と。「実際に会う」ことはスマホ会話に替えられません。人は一人では生きる喜びをじゅうぶん味わうことができません。他の人と顔を合わせて話してわかりあって心も繋がれる、その時魂の真の満足が生れる—これが聖書の教える「人間は共に生きる」と言うことです。これが危機に瀕していることが、体に痛みは伴わなくても「現代の苦難」の一つです。

¹ 2020 年 10 月時点で。

² 科学史家 村上陽一郎氏のことば。

気付かないうちに足をすくわれるかもしれません。それを乗り越える第一歩は、「共に生きる」ことの大切さを聖書からよく知ることです。

祈ります。

天の神よ、今回のコロナ禍の中で肉体的に・精神的に苦しんでいる人たちを助けてください。そのような中で私たちに、見失われがちな「共に生きる」ことの大切さに気付かせて、魂の満足を与えて下さい。イエス・キリストの御名により祈ります。

2020年10月9日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」